カリフォルニアの風（６月号）

「集中学習を目前にして」

海外子女文芸作品コンクール「作文・詩・短歌・俳句」に１２２人の子どもたちが応募してきました。以下は、その中の作文の題名(応募書のまま)です。

・はじめてのバックパッキング　・いそがしいリュック　・運動会の思い出
・まざった気持ち　・日本の学校について　・白組勝ちの運動会
・カサデロミュージックキャンプ　・ポジティブなバスケ　・わたしのアメリカ生活
・ほどほどに　・ちょっと こわかった きれいなビーチ
・日本語ほ習校はさい高だ！　・大切な友だち　・アンサンブル
・アメリカでの生活　・あるイベント　・ハイチュウ　・バイオリン
・アメリカに来て思った事　・「今、アメリカで頑張っている事」
・日本の給食大好き！　・びっくりいっぱいアメリカの学校
・“おはんじょうひおめでほう”　・不利をカバーして勝つ作戦
・アメリカに来てから　・ぼくの大チャレンジ　・身近な問題で手いっぱい
・日本とアメリカのにてる所とちがう所　・アニメが与える影響
・ロボティックス　・日本の給食を食べられない私は

いずれも力作で、受け身でなく、自分から作文を書いている姿が浮かんできて、考えること、書くこと、何かに一所懸命打ち込むことは、その子どもにとってかけがえのない「大切なもの」を生んでいると読後に感じました。

「〇〇させられる」という意識を持つと意欲が下がってしまうことは大人も同じです。
「書きたいな」と思える内容がなければ、「書くこと」の意欲は高まりません。作文の題名一つ一つを見ると、実際に経験したこと「体験」が「書くこと」へのきっかけになっています。
でも体験をしただけでは、その状態で終わってしまいます。「書きたいから、書く」という行動へと主体的にさせるにはどうすればよいでしょうか。
私が考えた納得解は、体験を通して、五感を働かせて実際に見たり聞いたり触れたりすることで生まれた「気付き」や「予想外の学び、新たな学び」を、体験した時の傍らにいた人（お家の人、お友だちなど）へ伝える「言葉のキャッチボール」が大切なのでは、と考えています。

集中学習を目前に控え、各校、特別プログラムの計画運営にも熱量が高まってきています。
子どもたちには、仲間や異学年との合同の取組の中で「新しく学んだこと」を「言葉のキャッチボール」を通じて深めたり広げたり、また学んだことを書いたり発表したりしてほしいと願っています。そのため各校にプログラムの活動の目的や目標を見失わないよう呼び掛けています。
集中学習中も、子どもたちへのサポートをどうぞよろしくお願いいたします。